

自宅で服用 薬剤師が見守り

「高齢の親が薬をきちんと飲んでいるか心配」——。家族から、そんな声が上がることがあります。薬の種類が増え、正しい服薬が簡単ではなくなる高齢期。認知症で飲んだことを忘れ、もう一度飲んでしまう場合もあります。自宅で安全に薬を飲むための工夫を取材しました。

(阿部明霞)

お薬カレンダー活用

「ご飯はしっかり食べていますか?」「毎日おしいくいたっていますか?」

神奈川県で一人暮らしをする女性84歳の自宅に、薬剤師の吉田匡志さん(40)が体調などを尋ねながら、曜日と朝、昼、夕などの表示で区切られた「お薬カレンダー」を確認した。

女性は毎食後と寝る前に高血圧の薬や便通をよくする薬などを飲んでいて、月2回、担当薬剤師が訪問し、薬が正しくセットされているか、飲み残しがないかなどをチェックしている。

「飲み忘れたら、まとめて飲めばいい?」と女性が聞くと、「まとめて飲むのは絶対にだめですよ。夜は、『朝と昼に飲み忘れた』と気づいても、夜の分だけを飲んでください」と吉田さんは優しく伝えた。

訪問して管理、飲み忘れ防ぐ

医師と処方調整も

吉田さんが勤める「メディカルガーデン」は、同県海老名市と厚木市で調剤薬局8店舗を運営している。薬剤師が個人宅を訪ね、薬の管理や服用を見守るサービスに力を入れている。

毎日、薬を飲み続けているうちに、きょう飲んだかどうか、記憶が曖昧になることもある。ただ、飲み忘れた健康状態に影響しかねない。余った薬がたまってしまう。そんな事態を避けるためのサービスだ。

「薬を定期的に届けるだけでなく、飲み忘れや飲み間違いがないか、体に合っているかなどを専門家として

見ている」と吉田さん。必要に応じて、医師と薬の処方について調整もする。

多くの訪問先で、「お薬カレンダー」や「服薬ボックス」を使っている。「壁に掛けるカレンダーに、その日の分をテープで貼っておく方法で忘れずに飲める人もいます」(吉田さん)。

その人に合わせて、正しく、忘れずに飲み続けられる方法を見つけていく。

女性の場合、家族の電話や、訪問介護サービスのヘルパーや訪問看護師の声かけなどで、毎日の飲み忘れを防ぐようにしている。女性を担当する「生活支援ステーション じよんのび」のケアマネジャー、王丸由起子さん(41)は「お薬カレ

ンダーを使い始めて、飲み忘れが減り、体調もだいぶ改善されている」と話す。

24時間 365日態勢

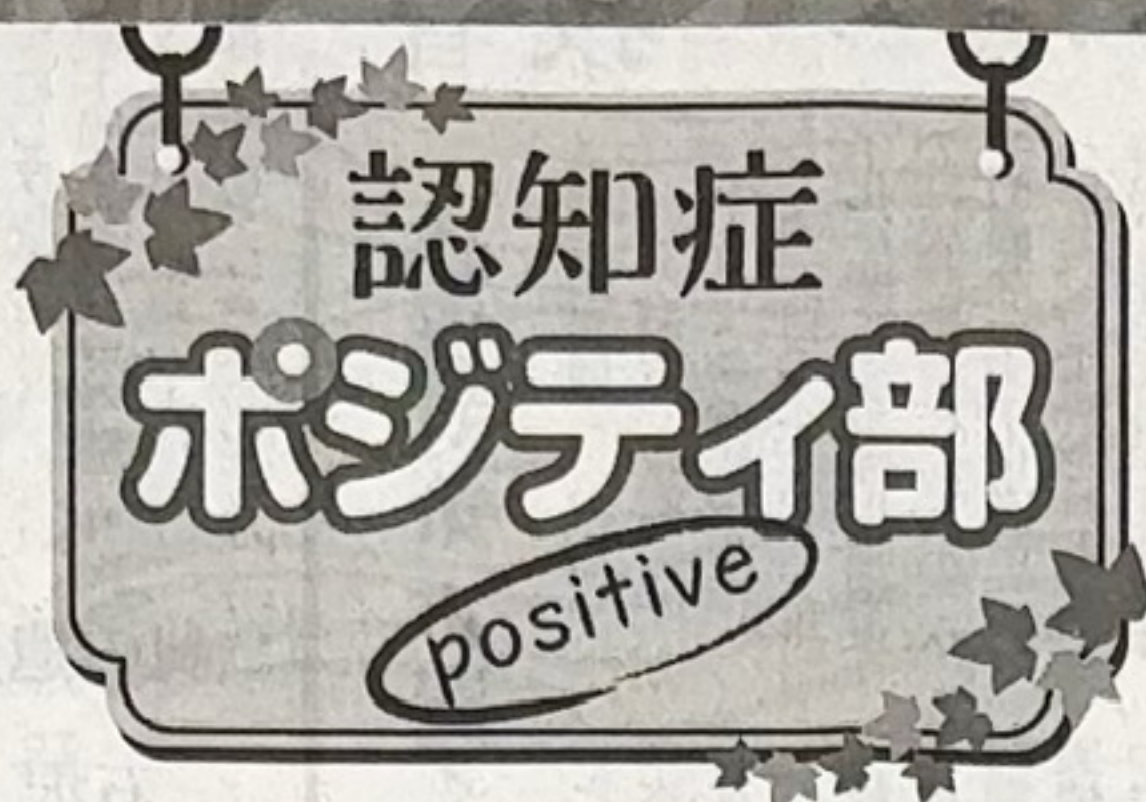
メディカルガーデンには訪問サービス専従の薬剤師

が50人いて、週末や深夜などの緊急時にも対応。24時間・365日態勢で約400人を見守っている。4人に1人は認知症の人だ。

女性のケースでは、通院が難しくなった今年4月から、訪問診療を利用するのに合わせて、薬剤師の訪問も受けるようになった。ケアマネジャーからの相談をきっかけに訪問が始まる場合もあるという。

薬剤師の訪問は月に最大4回。自己負担は、介護保険サービスを1割負担で利用している場合で、1回につき500円ほどだ。

薬剤師の吉田さんは「認知症などで不安があれば、誰かの見守りがある状況で薬を飲むのが望ましい。家族や訪問介護のヘルパー、訪問看護師との連携がとても重要になる」と話す。



* 認知症になっても「ポジティブ」(＝前向き、積極的)に生きるヒントや取り組みをお届けします。



「お薬カレンダー」に薬をセットしながら、体調などを尋ねる吉田さん

1回分の薬 まとめて小袋に

消費者庁の2019年の発表によると、薬のプラスチックやアルミの包装を飲んでしまうケースが、高齢者の誤飲・誤食事故の3分の1以上を占める。食道などを傷つけてしまった事例も報告されている。

包装を誤飲のおそれ

誤って包装から錠剤を取り出さないまま飲んでしまう不安があるなら、家族などが服用前に小さな容器に出して、薬だけ飲めるようにしておくといった対処が必要だ。

薬局で処方薬を受け取る時に「一包化」を頼める場合もある。追加の料金が必ずしも必要だが、複数の薬を1回分ずつ、包装から取り出して

服薬の不安や悩み、どう対処?

飲み忘れや飲み過ぎが心配

- ☑ 「お薬カレンダー」を使う
- ☑ 服薬支援アプリやロボットの活用

- ☑ 薬局で「一包化」をしてもらう
- ☑ 介護サービスで服薬介助を利用

チェックの依頼や相談がしたい

- ☑ かかりつけ薬局、かかりつけ薬剤師をもつ
- ☑ 薬剤師による定期的な訪問サービス

その人の状況で手段や組み合わせを考える



が一般的だ。小林さんは、「朝、昼、夕で違う色のペンを線を書いて目立たせる

工夫をすれば、さらにわかりやすくなる」とアドバイスする。

高齢期の薬の管理では、「かかりつけ薬局」を1か所持し、何でも相談できるようにしておくことが強い。同じ薬剤師に継続して担当してもらう「かかりつけ薬剤師」という制度もある。自分の状況をよく知っていてくれ、薬が効いているかや、副作用がないかなどにも目配りしてもらえる。市販薬との飲み合わせなども気軽に確認できる。

利用には、医療費が3割負担の場合で、最大100円程度の自己負担がある。

今回の「認知症ポジティブ部」は、11月14日に掲載予定です。高齢期の生活や認知症についての思い・疑問をお寄せください。メールansin@yomiuri.com、ファクス03・3217・9957。